

「ある」と「いる」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

(1) 「ある」ということば

私たち大人も、子どもたちも、日常会話の中で「ある」ということばを、非常によく使う。

「はさみ、どこにある?」「棚の上にあるよ。」

「ウーロンハイありますか?」「はい、あります。」

「理科のノートがないよ〜」「ここにあるじゃん!」

といった具合だ。上の例は、実体のある「もの(物体)がある」という用法だが、実体のないものが対象の場合にも使われる。

「今日の夕方、時間ある?」「大丈夫、あるよ。」

「君、やる気あるの?」「もちろん、あります!」

「留守中に電話、あった?」「ああ、あったよ。」

実に多くの場面で「ある」が登場する。また「あった」「ありそう」「あれば・・・」など、さまざまな形に変化(活用)する。私たちも子どもたちも、あまりにも日常的に使っていることばなので、「ある」の意味や価値に目を向けたことはあまりないだろう。

(2) 「ある」と「いる」の違い

「ある」と同じぐらいよく使うことばに「いる」がある。この2語は似ているが、はっきりと使い分けがなされている。実体のあるもので比較してみよう。

○「理科室に、先生がいる。」

○「実験戸棚に、顕微鏡がある。」

人間(ヒト)の場合は大抵「いる」、もの場合は「ある」で正しいようだ。

○「公園のクヌギの木に、カブトムシがいる。」

○「川の土手に、桜の木がある。」

動物(昆虫を含む)の場合は「いる」、植物の場合は「ある」となることが多い。下の例は面白い。

○「先生、飼育ケースに死んだアゲハがいる。」

○「先生、体育館の裏にコウモリの死体がある。」

同じ遺骸なのに、「いる」と「ある」が混在している。一般に動物や昆虫の遺骸は、すでに命がないので「ある」なのだろうが、アゲハの場合、少し前まで生きていて、「ある」とは言いにくいのだろう。コウモリは、発見時にすでに死んでいたのに、「ある」なの

だ。或いは、死んだ「アゲハ」と言えば「いる」になり、コウモリの「死体」と言えば「ある」のほうが適当なのかも知れない。

(3) 「キノコがいる」

「先生、ジョンソンの裏らへん(ウサギ小屋の裏あたり)に、黄色っぽいキノコがたくさんいる!」

この用法は、非常に興味深い。キノコ(菌類)は動物ではないので、「キノコがある」が正しく「キノコがいる」は誤りだ。しかし、特に低学年の子どもは「キノコがいるよ」「キノコがいたよ」といった表現をよくする。キノコを動物だと思っているのか、あるいは、動物とは思っていないが、動物に近い存在と認識しているのかも知れない。

ほかにも、子どもの会話や発話の中には「ある」と「いる」の境界線が曖昧なものが結構あるように思う。

(4) 本当に「ある」のか?

さて「ある」とは、どんな状態を言うのだろうか。哲学的な問いに言い換えれば

「ある」とはどんなことなのだろう。

ということになる。私は本校の新教科「てつがく科」で、この問いを3年生の子どもたちに投げかけてみたいと思っている。いや、3年生には難しい問いかも知れない。しかし、考えさせる価値はあると思う。



「机の上に石がある」・・・これは目の前にある紛れもない「観測事実」である。しかし本当に石は「ある」のだろうか?なぜ「ある」と断定できるのだろうか?「目に見えるから」・・・番最初に出てきそうな理由(根拠)だ。では「目に見えるもの」は、すべて「ある」と言えるのだろうか?逆に「目に見えないもの」は、すべて「ない」と言えるのだろうか?